

## 鑑賞の手引

原三溪 はらさんけい 《白蓮》 びやくれん 昭和6年(1931年) / けんほんちやくしよく 絹本着色



### ■三溪と蓮

蓮は、三溪の生まれ故郷・岐阜で生産が盛んであり、三溪にとって馴染み深い植物のひとつでした。三溪が横浜の本牧に設計した、自身の邸宅を含む広大な日本庭園・三溪園にもたくさんの蓮が植えられ、いまでも夏の早朝には、花が開く瞬間を見ることができます。三溪はこのような蓮を目で楽しむだけでなく、蓮の葉の上に蓮の実の炊き込みご飯をのせた「浄土飯」と呼ばれる料理を茶席で客人にふるまい、そのすばらしい薫りと味を皆で分かち合いました。この作品は、このように三溪が愛してやまなかった蓮を描いた作品のひとつです。

### ■鑑賞のポイント

① 蓮の描かれ方に注目してみましょう。没骨法(もっこつほう)と呼ばれる技法で描かれており、輪郭線がまったくありません。蓮のかたちを、線ではなく色によって描き出しています。また、色面の中にも濃淡があることで、やわらかな質感や立体感が表現されています。これは、溜込(たらしこみ)という技法で、先に塗った絵の具が乾かないうちに、ほかの絵の具をその上からたらし、にじみをつくって独特の効果を得るものです。こうした技法は、桃山時代から江戸時代にかけて興った琳派(りんぱ)と呼ばれる傾向の芸術家たちが好んで用いた技法です。琳派の作品を高く評価していた三溪は、この絵に見られるような巧みな表現を、自身が所蔵していた琳派の作品から学んでいたのかもしれませんが。

② 蓮は三溪がもっとも好んで描いたモチーフのひとつです。展示室には、この作品以外にも蓮を描いた作品がいくつか展示されています。ほかの蓮の作品と、この作品の共通点、そして異なる点はどのようなところでしょうか。色やかたち、花の様子に注目してみてください。また、三溪は自身の描いた作品を、茶人仲間や支援した芸術家ら、親しい人々に贈っていました。それぞれの作品がどのような関係の人に贈られたのか、また、三溪がどのような気持ちでその作品を贈ったのか、展示室の作品解説を参考に考えてみてください。